

シンポジウム

未来志向の 日本語教育 2.0

オンライン会議

2021年2月13日(土)
14:00~17:10
(日本時間)



主催
筑波大学 CEGLOC日本語教育部門

共催
筑波大学 CEGLOC
日本語・日本事情遠隔教育拠点

共催
JSPS 研究拠点形成事業 アジア・アフリカ学術基盤形成型
「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」

趣旨

2019年2月16日に筑波大学CEGLOC日本語・日本事情遠隔教育拠点がシンポジウム「未来志向の日本語教育」を開催しました。本シンポジウムはシリーズの第2弾となります。21世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのか、口頭発表およびポスター発表を通して、考えていきます。

プログラム

詳細は2ページをご参照ください。各口頭発表およびポスターの要旨は3ページよりご覧になれます。

アクセス

本シンポジウムはオンライン(Zoom)で開催され、参加は無料ですが、2021年2月8日(23:55日本時間)までに**参加登録**をしてください。2021年2月10日までにミーティングのアクセスリンクを送信します。



[参加登録フォーム](#)

問い合わせ先：vanbaelen.ruth.gp@u.tsukuba.ac.jp

プログラム

13:45~	開場：Zoomにアクセス 2021年2月10日までにミーティングのアクセスリンクが届かない場合は <vanbaelen.ruth.gp@u.tsukuba.ac.jp>にご連絡ください。				
14:00~ 14:10	開会の挨拶：伊藤秀明（筑波大学 助教／日本語・日本事情遠隔教育拠点 副点長） 来賓の挨拶：臼山利信（筑波大学 教授／グローバルコミュニケーション教育センター長）				
14:10~ 14:30	口頭発表 1：崔智恩 文末表現から見る説得コミュニケーションにおける日韓語の対照研究				
14:35~ 14:55	口頭発表 2：日暮康晴 「とても」およびその類義語の使用実態調査 —ポライトネスに指向した語の使い分けに注目して—				
15:00~ 15:20	口頭発表 3：堀恵子 やさしいニュースをめぐるディスカッションへの質問リスト導入の効果				
15:25~ 16:05	ポスターセッション：5つのブレイクアウトルームで行われます。				
	ポスター① 中嶋さくら、小野正樹、桐井円理、鈴木海翔、Nguyen Thi Linh Chi JSL児童生徒のための学習辞書開発の意義と課題	ポスター② 中山健一 学習者オートノミーの育成をめざした上級読解作文授業	ポスター③ ニノ宮崇司、李国玲、リナアリ、朱炫姝、高揚、ウマロワムノジャット、フルカル カミロヴナ、レーティトウハー、小野正樹 日本語母語話者・日本語学習者による禁止・依頼表現の評価—ポライトネスの観点から—	ポスター④ 山下悠貴乃、松永修一、新嶋良恵 日本語教員養成課程における国際共修科目の開発	ポスター⑤ 片山奈緒美 クルド人女性のためのオンライン日本語レッスン実践報告 —コロナ禍に実現した学びの習慣—
16:10~ 16:30	口頭発表 4：稲田朋晃、松永修一 留学生と日本人学生がオンライン・イベントの協働企画で得た学びとは何か —「防災クリスマス」の実践を通して—				
16:35~ 16:55	口頭発表 5：関口美緒 ZOOMオンライン授業における「顔出し（カメラオン）」の問題 —講師側の視点から—				
17:00~ 17:10	総括：小野正樹（筑波大学 人文社会系 教授）				

本シンポジウムの録画はされませんが、記録のため、スクリーンショット等が保存されます。予めご了承ください。

シンポジウム実行委員 ヴァンバーレン・ルート、文 昶允

口頭発表およびポスターの要旨

<p>口頭発表 1</p>	<p>崔智恩（筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群 国際日本研究学位プログラム 博士前期課程1年）</p> <p>文末表現から見る説得コミュニケーションにおける日韓語の対照研究 21世紀に求められる日本語教育の目標は日本語を用い日本語母語話者とコミュニケーションできるようになることである。そこから、従来の日韓語対照研究は、様々なコミュニケーション場面をめぐり、研究してきた。ところが、日常生活の中で日本語学習者は多数の説得場面にぶつかるにも関わらず、説得コミュニケーションにおける日韓語対照研究は少ない。そこで、本研究では、語順は似ているものの言語表現の使い方の差を持つ日本語と韓国語を対象とし、待遇上の積極的な意味を持っている文末表現に表れる説得コミュニケーションの言語スタイルを比較していくことにする。日本と韓国のドラマから収集した用例を「促進させる説得場面」と「抑制させる説得場面」に分け分析した結果、日本語は「非決めつけ型」を多用するが、韓国語は「決めつけ型」を多用することが分かる。さらに、両言語の言語スタイルに影響を与える要因をポライトネスの観点から考察していく。</p>
<p>口頭発表 2</p>	<p>日暮康晴（筑波大学 人文社会科学研究科 国際日本研究専攻 博士前期課程2年）</p> <p>「とても」およびその類義語の使用実態調査 —ポライトネスに指向した語の使い分けに注目して— 程度副詞「とても」は初級日本語教育における代表的な語であるが、日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語学習者（以下、学習者）の使用頻度には異なりがあることが報告されている（迫田・石川・李編2020）。本研究では、学習者コーパスを使用して母語話者と学習者の「とても」およびその類義語の使用実態調査を実施した。その結果、母語話者は「とても」を主に客観的な情報伝達のために使用し、類義語の「すごく」、「本当に」を相手との心的距離調整のために使用していることが明らかになった。また、学習者の語の選択傾向は学習段階が上がるにつれて母語話者の傾向に近似してゆくものの、使用抑制に関しては上級段階においても母語話者と異なる傾向が確認された。以上の結果から、行動中心アプローチなど個別具体的な状況を想定した教育内容を考える上で、語の使い分けを日本語コミュニケーション能力の一要素として取り扱うことの重要性が示唆された。</p>
<p>口頭発表 3</p>	<p>堀恵子（筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 非常勤講師）</p> <p>やさしいニュースをめぐるディスカッションへの質問リスト導入の効果 社会問題に関して批判的思考力を養い、考えを伝え合うことを目的とした中級レベルの授業において、やさしいニュースを聞いて内容伝達、意見交換をする活動の中で、質問力に注目し、質問リストを参照しながら質疑応答させる活動を行った。 質問リストは、「不明な言葉を聞く／比較／意見を聞く」などの機能を持つ質問から成る。提示方法は、コース開始時の活動内容説明にあたってニュースの構造の説明に続いて提示し、具体的に質問を作らせた。その後は、教材冊子に載せて参照させたり、振り返りでは受けた質問を記述させたりした。 授業終了時のアンケート結果では、社会の問題についてディスカッションや発表、質問ができるようになったと答えた割合が増えた。しかし、ペア発表での質問は少なく、効果は限定的であった。今後は質問リストの提示方法や質問によってディスカッションがどのように深まったかに注目させるなど、更に工夫をしていきたい。</p>
<p>口頭発表 4</p>	<p>稲田朋晃（十文字学園女子大学 国際交流センター 講師） 松永修一（十文字学園女子大学 人文教育学部 文芸文化学科 教授）</p> <p>留学生と日本人学生がオンライン・イベントの協働企画で得た学びとは何か —「防災 クリスマス」の実践を通して— 本学（十文字学園女子大学）の留学生別科では、進学や就職をめざす留学生が1年～1年半程度をかけて日本語を学んでいるが、これまでキャンパス内で日本人とコミュニケーションをとる機会が少なかった。また、日本人学部生たちも異文化を背景に持つ人たちとの接触に欠けていた。そこで、発表者らは別科留学生と日本人学部生の交流と共修を目的とした、「多文化スタディ」という授業を開発・実施した。まず、学生らは異文化コミュニケーションの基礎や「やさしい日本語」の概念などを学んだ。そのうえで、留学生と日本人の混合グループを構成し、多文化的イベントの企画と構成を進めた。最終的な成果として、世界各地の「クリスマス」文化を楽しみながら、「防災」の重要性を学ぶ2時間のオンライン・イベントを企画・実行した。本発表では、授業およびイベントの経緯を報告したうえで、参加学生らへのアンケートから明らかになったことを報告する。</p>

<p>口頭発表 5</p>	<p>関口美緒（筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 非常勤講師／メリーランド大学グローバルキャンパス 非常勤准教授）</p> <p>ZOOMオンライン授業における「顔出し（カメラオン）」の問題—講師側の視点から— COVID-19の影響で、全世界的に授業のオンライン化が進んだ。いわゆるZOOMによる授業である。それに伴い、大学の講師会議も頻繁に行われ、その度ZOOMにおける学生の顔出しいわゆる「ブラックスクリーン（学生の名前だけの黒い画面）問題」が議論される。 この問題について、Spring&Nakamura(2020)は、ESLの日本人学生の感想を調査している。本発表では、Spring&Nakamuraとは対照的に講師からの感想や意見に注目した。2020年12月から2021年1月にかけて、アメリカの大学の日本校（Office 365 Forms）、メキシコ・日本・ハワイ（メール）で日本語の授業を担当している講師から回答が得られた。「顔出し」に対するクラスルールや講師のストレス等について質問した。自由回答では講師側の様々な感想が得られ、今後のオンライン授業への課題も見えてきた。また、発表者が行ったオンライン授業Live StreamingクラスとHybridクラスを紹介し、実際の「学生の顔出し」事情、クラス内コミュニケーションの方法、問題点への対処を報告する。</p>
<p>ポスター ①</p>	<p>中嶋さくら（筑波大学 人文社会科学部 国際日本研究専攻 博士前期課程2年） 小野正樹（筑波大学 人文社会系 教授） 桐井円理（筑波大学 日本語・日本文化学類4年） 鈴木海翔（筑波大学 日本語・日本文化学類4年） Nguyen Thi Linh Chi（筑波大学 人文社会科学部 国際日本研究専攻 博士前期課程2年）</p> <p>JSL児童生徒のための学習辞書開発の意義と課題 2018年現在、公立学校には93,133人の外国人児童生徒が在籍している。また、日本語指導が必要な児童生徒数も50,759人と、過去最高を記録している（文部科学省2019）。このような状況の中、学校現場では、初期の生活日本語指導だけでなく、教科学習につなげる日本語指導が課題となっている。本発表では、日本語を母語としない児童生徒の教科学習支援を目的としたイラスト付き学習辞書を提案し、その意義と、開発に関わる課題について述べる。辞書のプロトタイプとして小学校3年生理科のベトナム語辞書の製作し、辞書を用いたユーザー調査を行った。その結果、イラストによる語の理解の促進、児童が自らわからない語を調べられるという効果がある一方で、掲載語の不足や機器の操作の難しさなどの課題が残されていることが明らかになった。</p>
<p>ポスター ②</p>	<p>中山健一（筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 非常勤講師）</p> <p>学習者オートノミーの育成をめざした上級読解作文授業 筑波大学交換留学生対象「総合日本語」コース上級レベル「読む書く7」の実践を報告する。帰国後あるいは大学卒業後も継続して日本語学習ができるようになるための橋渡しの授業、学習者オートノミーを育成する授業をめざした。まず青木（2001）に従い「学習者オートノミー」を「学習者が、自分のニーズや希望に役立つように、【中略】自分の立てたプランを実行する能力」とし、その育成をめざした実践として主に次の3つを報告する。（1）グループワークを重視する。書く活動では学生がお互いのレポートを評価しリライトするが、その際、気づきのポイント理解を促すため、教師がチェックシートを配布し、また学生が教師にいつでも質問できるようにする。（2）読解では、興味関心が近い人どうしでグループを作り、各グループで興味がある新書を選んで、その内容を発表する。（3）インターネットなど必要なリソースを適切に使えるように助言する。</p>
<p>ポスター ③</p>	<p>二ノ宮崇司（カザフ国立大学 准教授） 李国玲（長安大学 講師） リナアリ（カイロ大学 副教授） 朱炫姝（日白大学 講師） 高揚（西安外国語大学 講師） ウマロワムノジャット（ウズベキスタン国立世界言語大学 講師） フルカル カミロヴァ（ウズベキスタン言語文学大学 講師） レーティトウハー（フエ外国語大学 講師 筑波大学大学院生） 小野正樹（筑波大学 人文社会系 教授）</p> <p>日本語母語話者・日本語学習者による禁止・依頼表現の評価—ポライトネスの観点から— 本研究では日本語母語話者と日本語学習者（ウズベキスタン、エジプト、カザフスタン、韓国、中国、ベトナム）が禁止・依頼表現をどのように捉えているのかを調査し、その結果を示す。この研究はパイロット調査であるため、様々な方法によってデータを収集する。まず日本語母語話者・学習者には、談話完成テストにおいて、妥当な禁止・依頼表現を書いてもらい、選択テスト（例①ここで食べないでください、②ここで食べないほうがいいよ、③ここは飲食禁止です、など）において、妥当な表現を選択してもらおう。またアンケート調査によって、複数の禁止・依頼表現をそれぞれどのように感じるのかを指摘してもらおう。本研究の意義として、禁止・依頼表現の観点から、両グループ間の文化的差異の有無を客観的に指摘することができる。そして文化的差異がある場合、ある学習者グループがどのような点に注意して禁止表現を使うべきなのかを指摘することができる。</p>

<p>ポスター ④</p>	<p>山下悠貴乃（十文字学園女子大学 教育人文学部 文芸文化学科 講師） 松永修一（十文字学園女子大学 教育人文学部 文芸文化学科 教授） 新嶋良恵（十文字学園女子大学 教育人文学部 文芸文化学科 講師）</p> <p>日本語教員養成課程における国際共修科目の開発</p> <p>本発表では、文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」の一環として行ったプログラム開発の成果と今後の課題について述べる。本学では2020年度より日本語教員養成課程がスタートした。課程の特徴として、日本語や日本語教育の知識を修得するだけでなく、講義内における「つながり」「関係性」のワークを通して、思考を活性化させ協働するチームビルディングを目指し、「多文化共生ワークショップ」をデザインした。具体的には、留学生と日本人学生が互恵的に学び、授業と連動させた課程内外の活動に取り組む、というものである。授業では、留学生と日本人学生が混在するグループごとに、多様な文化的背景を持つ人々を対象としたイベントを企画する課題に取り組んだ。その中から実際にタイの大学と共催で七イベントを企画、実施にまで発展した。その経緯を中心に、国際共修の場づくりにあたり考慮した点、改善点などについて報告する。</p>
<p>ポスター ⑤</p>	<p>片山奈緒美（筑波大学 人文社会科学研究科 国際日本研究専攻 博士後期課程）</p> <p>クルド人女性のためのオンライン日本語レッスン実践報告—コロナ禍に実現した学びの習慣—</p> <p>2020年11月コロナ禍の最中に、埼玉県に集住するトルコ系クルド人の支援者たちが女性を対象にしたマンツーマンのオンライン日本語レッスンを立ちあげた。2021年1月3日現在、学習者51人、ボランティア講師29人が登録し、8ペアのレッスンを開始している。クルド人女性は日本語未習得者が多く、日常生活は日本語を習得した一部のクルド人や日本人支援者に全面的に頼りがちである。その状況を日々の支援を通して観察していた支援者たちは、女性たちが自ら学ぶことによって他者依存から抜け出して精神的に自立して生活できるようになることを期待する。Zoomアプリを導入し、ひらがなとカタカナを学んでチェックテストに合格したペアのみ教科書を使った学習に入ることにしたところ、支援者たちの意図どおり、毎週定時に勉強の時間を確保し、自宅学習することが習慣化しつつある。筆者はこの企画の立ちあげ当初から関わっており、本発表はその実践報告を行うものである。</p>